

公益財団法人
ヤマハ発動機スポーツ振興財団
Yamaha Motor Foundation for Sports

■設立：平成18年11月20日
■事業：スポーツ文化・啓発事業、スポーツチャレンジ助成事業、スポーツ振興支援事業
■特徴：アスリートやスポーツ科学の研究者、留学生等に対する「スポーツチャレンジ助成事業」では、成長へのプロセスを重視した独自のしつこい(質濃い)サポートプログラムを実施。「世界に飛ばたく逞しい人材」の育成を目的に、PDCAサイクルに即した目標設定や成果報告、また異分野のチャレンジャー(助成対象者)同士の交流機会等を設けることでチャレンジスピリットを喚起している。



ヤマハ発動機は、創立以来モータースポーツやマリンスポーツの普及、さらにサッカーやラグビーチームの運営を行いながら、企業スポーツの枠を越えたスポーツ振興活動に取り組んできた。創立50周年を機に、2006年に設立した公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団(YMFS)もその一つだ。YMFSスポーツチャレンジ助成のチャレンジャー(助成対象者)と企業経営者が、それぞれの立場からチャレンジをテーマに語り合う対談企画。その第1回目は車いすアスリートの副島正純選手をお迎えした。

感動を生む、期待を超えるチャレンジ。



そえじま まさみ | 1970年生、長崎県出身。業務中の鉄板落下事故により脊髄を損傷し、30歳を過ぎてから本格的に車いすマラソン競技を開始。トップアスリートとして世界メジャーマラソンを中心に活躍し、パラリンピックには2012年ロンドン大会(車いすマラソン4位)まで3大会連続で出場した。公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団の助成制度「YMFSスポーツチャレンジ助成」の第4期生。

「悔しや」なチャレンジ精神の源

柳 副島選手は九州でしたよね。私も九州、鹿児島出身です。
副島 はい、少し前までは福岡を拠点にしていたんですが、いまは実家のある長崎の諫早で活動しています。今年から新しいチャレンジも始めましたので、そのトレーニングの関係もありまして。

柳 車いすマラソン選手のトレーニングって、どんなことをするのですか？ お一人で？
副島 毎日最低40キロ走ることが日課です。それから筋力トレーニングや水泳などもやりますが、大会の日やコンディションに合わせてマナージャー兼・鬼コーチ(奥さまの美幸さん)と相談しながら試行錯誤でメニューを組んでいます。トレーニングパートナーや、専門知識を持った指導者がいないことが僕ら障害者アスリートの課題でもあるんです。

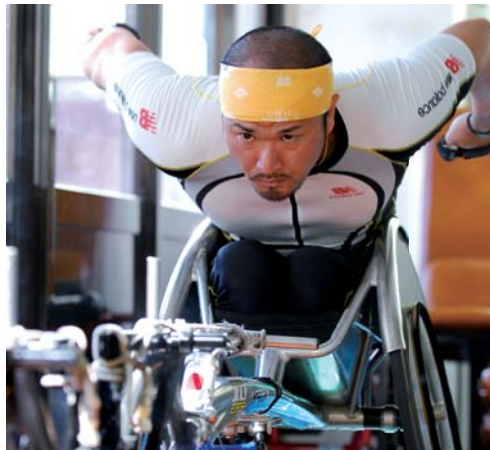
柳 アメリカへの武者修行は、そういう環境を求めてということですね。
副島 そのとおりです。2010年にヤマハ発動機スポーツ振興財団の助成金をいただいて、イリノイ州立大学のキャンプに参加しました。イリノイ大にはたくさんの方のトレーニング指導者がいて、充実した設備にも

驚かされました。あの合宿でロンドンに向けてもう一度火が入ったという感じです。

柳 私もアメリカには長く駐在しましたが、やはり障害のある方への社会的な支援がかなり発達した印象がありました。そうした社会の基盤がスポーツ環境にも反映されるのでしょね。副島選手はもうベテランの領域だと思えますが、チャレンジ精神の源は？
副島 僕の場合、悔しさですね。すべて優勝するつもりで毎年10レース近く走りますが、実際に勝てるのは一つか二つ。そう考えると、悔しい思いをするために頑張ってる、悔しさがまた燃料になるところがあるかもしれません。

期待を超えて「感動」の連鎖を

柳 先ほど、新しいチャレンジと言われましたが、あれは？
副島 パラリンピックでの金メダル、それから世界記録の樹立というやり残したことがありますから車いすマラソンは続けます。ただ、2016年のリオ大会には新競技のトライアスロンでも日本代表として出場したい。今年から本格的に取り組みを始めたのですが、まだまだ世界トップとの差は非常に大きくて、だからこそ必ず実現したい目標になっています。ところで企業経営者のチャレンジとはどういうものなんですか？



柳 よく話すのですが、端的に言う「期待を超える」こと、これに尽きると思います。お客さまの期待を超える、株主や取引先の期待も超える、それが仕事の目標です。たとえばお客さまの期待値どおりの商品というのはこれはまだ不十分だと思うのですが、どう思いますか？
副島 期待どおりであれば購入者として文句はありませんが、うーん、驚きはしませんね。

柳 そう、驚いてはくさらない。でもその期待のラインを超えていけば驚きも生まれるでしょうし、それが人々の感動にもつながる。高い目標に向かう時には、まず私たち自身が

燃える、開発者が燃える、販売店の皆さんも燃える、そういう熱が商品を通じてお客さまの心を昂ぶらせる。この連鎖を生み出すことにチャレンジしています。
副島 スポーツの感覚と似てますね。柳 そうかもしれません。私たちの世界も常に競争。期待値どまりの商品は、やはりすぐに追いつかれますから。たとえばヤマハ発動機にはラグビー部があるのですが、3年前には下部リーグとの入替戦を経験するまでチーム力が落ちていました。そこに清宮克幸監督が来て「優勝を目指す」と。我々からしたら「少しづつ確実に力をつけて」と考えるけど、彼はいきなり「いやトップだ。11位から一気に優勝だ」と言い続けた。

副島 なるほど、それも期待を超えよう目標設定ですね。そして選手が燃

える、ファンも燃える、連鎖が生まれる、と。
柳 見ていると練習方法にも工夫がありますし、「トップだ」「優勝だ」と言われ続けた選手がまずその気になって、それが私たちにまで広がってきた(笑)。でも確実に力をつけて本当に優勝が狙えるところまでできました。

副島 嬉しそうですね。スポーツがお好きなんですね。
柳 ええ、ラグビーもサッカーも可能なスタジアムで観戦しています。最近では負けてむしろしゃしゃりた気持ちで、うまく切り替える術まで身につけました。

副島 スポーツには力があります。友人の息子さんが、彼も重い障害を負っているのですが、僕のレースを中継で見ながら「僕もこんなふうにならなれるかな」と呟いたそうなんです。そうして期待してくれる人がいるなら、僕はその期待を超えていきたい。いや、超えてみせます。